

財団「指導普及部会」委員による 2-2+3 “名盤・いまと昔” を教材に

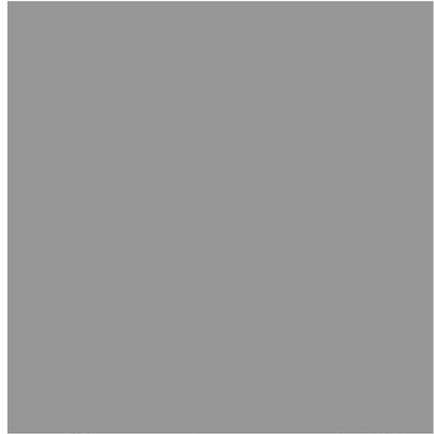
A列車で行こう Take the“A”Train (ビリー・ストレイホーン作詞、作曲)

埼玉県川越市立芳野小学校教諭 栗飯原喜男

昨秋公開された映画『スウィングガールズ』（監督・脚本 矢口史靖）は、女子高校生がスウィング・ジャズにチャレンジする姿を描いた青春映画として注目を集めました（DVD：TDV-15162、3月25日発売）。そのサウンドトラックに収められていたのが、ビッグバンドの定番曲『A列車で行こう』。オリジナルは、デューク・エリントン（1899～1974）が自らの楽団で、ステージや放送のオープニングとして演奏した、あのピアノのシングルトーンで始まるおなじみの曲です。作詞・作曲はエリントン楽団の分身といわれる名アレンジャー、ビリー・ストレイホーン（1915～67）で、1941年に初めてレコーディングされました。ステレオ録音（1966）では『ザ・ポピュラー・デューク・エリントン』に収められています（BVCJ-7342）。ボーカルの代表盤としては、スキヤットで迫るアニタ・オデイやサラヴォーンなどが挙げられます。

曲のタイトルになっている「A列車」とは、ニューヨークの地下鉄8番線のことだそうで、「ハーレムのシュガータウンに行くならA列車に限る。さあ来たぞ、線路のハミングが聞こえるよ……」といった調子のよい歌詞がついています。因みにブロンクスに向かう地下鉄はB列車と呼ぶそうです。

*



星の数ほどあるこの曲のディスクからここでは、ジャズ・トランペットの最高峰ともいべきクリフォード・ブラウンのプレイが圧巻のアルバム『スタディ・イン・ブラウン』を用います（UCCU-5023、1956年2月録音）。このアルバムについては、本誌の連載「名盤・いまと昔／ジャズの巨人たち」の第1回で悠雅彦氏がクリフォード・ブラウンをとり上げた際に触れています（平成14年8月号）。

小学校（中学年）の授業では、「これから聴く音楽はどんな乗り物を表わしていますか」といった発問から始めるとよいでしょう。スピード感あふれるアドリブが始まると、子どもの体もブラウンのトランペットと一体となって動き出してし

まうので、聴く楽しさが一段とアップします。

クリフォード・ブラウン（1930～56）は、豊かな才能に恵まれながら夭折したトランペット奏者の筆頭格で（他にファッツ・ナヴァロやブッカー・リトルらがいます）、そのプレイは、どんな曲のメロディーでも美しいブラウン流で歌い上げ、アドリブになれば余人の追隨を許さない奔放で熱く、しかも高密度の音楽を紡ぎ出し、それでいてジャズの入門者にもアピールする完成されたスタイルをもっているという、まさに理想のジャズメンで

した。

このディスクでは彼の他にサククス、ピアノ、ベース、ドラムスが加わって5人編成（クインテット）の演奏、意外に耳に新鮮に残る印象を与えます。ブラウンのソロは、前奏と終わりの演出が何とも絶妙です。発車を告げるベル、列車が少しずつ加速していく様子と、ハーレムに到着して減速する感じがユーモラスに表現されています。また、ドラムスのマックス・ローチの車輪の響きを表わした張りのあるスネアの音色も忘れられない効果です。